

生命としての信仰

生命

この『光明』は大学生も読めば、下女下男の中にも読者がある。わからぬ方のためを思つて、「生命」の二字から説明にかかる。

私は毎日水を飲む。水をとらねば死んでしまう。そうした場合に「水は我等の生命です。」という。然り、水がなくては死ぬるが故に水を飲む。断じて用意のために水を飲んだり、復習のためには水を飲まぬ。

一人の学生がいる。彼は常に優等生である。しかして彼は、他の学生よりも早く起き、遅く寝て勉強する。彼が常に優等生たるは彼の勉強努力の賜である。彼は常に「勉強努力は私の生命です」という。

家が貧しいのにたくさんの家内がある。彼は彼の労働によつて家族を養つている。一日彼が病気になるれば、家族は一日飢えねばならぬ。一家を支えるものはただ彼の健康である。そういう場合には「彼の生命は健康である。」といひ得る。

もつと進めて言えば、生命とは「いのち」である。これなくしては生きていくといふことは考えられない力、それが生命である。

親鸞と南無阿弥陀仏

ヴェートーヴェンの生命は音楽であつた。

吉田松蔭の生命は国家であつた。

乃木大将の生命は明治大帝であつた。

しかし、これはよい例である。

なくてならぬものが生命であり得るならば、泥棒は石川五右衛門の生命であり、「寝返り道徳」は支那政治家の生命であるかも知れぬ。

そうです。人が人であるためには、よしそれが七十八十の名もなき人生の敗残者に見える老婆であろうとも、生きていくためには何等かの生命がある。

彼がついに人生の全てに敗れても、彼の血の一滴がある間、彼の何処にか笑顔が見える間、彼にはそこに何等かの生命が流れつつあらねばならぬ。

南無阿弥陀仏は親鸞の生命である。如何に聖人に美しいところがあつても、彼から念仏を離しては考えられない。その一言も、その一行も、それはついに南無阿弥陀仏を離れては考えられない。南無阿弥陀仏が彼になり、彼が南無阿弥陀仏になつたのである。彼自身の中心生命こそ南無阿弥陀仏であつたのだ。

「教行信証」一部六巻こそは、実に聖人の唯一絶対の生命たる南無阿弥陀仏を体験せる生命の書である。彼の絶対無雑の信心を大胆に披瀝せる、感恩の血の記録である。教行信証はついに念仏の書である。廻向せられた生命たる南無の六字を離れてはついに何もものもないのである。

幽霊

幽霊。小暗い木蔭に青白い恨しそうな顔をしてフラフラと流れ動く者、彼は幽霊である。彼には足がない。「恨めしい」、それは幽霊の全体である。私は世のいわゆる幽霊を見たことがない。けれども人生の悪戦苦闘に疲れ、人に欺かれ、世の荒波に吹き流され、その尊き一生が将にこの「恨めしい！」の一語で終ろうとする幽霊を至る所に見る。

幽霊には足がない。風のまにまに流れ動く者は幽霊である。私は世のいわゆる幽霊を見たことがない。けれども白昼、至る所に、歩む足なき幽霊を見る。大地の上をしつかと歩まざる幽霊を見る。

権威者の如く立って「地獄も極楽も天国もないぞ。死は死滅である。火の消えたのと同じことだぞ。」と叫ぶ者があると、幽霊たる彼らはふらふらとそれに動かされて「それもそうだ」と言う。

権威者の如く立って「地獄も極楽もあるぞ。今にして死の覚悟をせよ。永遠の生命を得る道に入れ。」と叫ぶ者があると、幽霊たる彼らはふらふらとそれに動かされて「それもそうだ」と言う。

彼らは何故に風のまにまに動くか。彼らは、「彼自身の中心生命」を知らぬからである。

解

理論を聞くときみなわかる。道德の話でも、宗教の理論でも、それを頭で理解し、その要領をつかむことなら誰にでも出来る。

解というのは頭で道理が知れることである。頭で判断してまちがいだと思うことを信じられるものではない。理論的にわからねば何処までも研究するがよい。まちがいのない理論、知的満足をしておくことは、その人に正しい道を示す第一歩である。正しい知の満足を得ない信、言い替えると解のともなわぬ信は盲信である。盲信は正信ではないから、ついにほんとの力とはなつてくれない。

行

人は頭で知つてそれだけで満足出来るものではない。私どもの魂はもつとそれが私どもの本質的根本的な心の流れに、それを見出そうとする。

行というのは信仰が単に頭の問題でなくて情意の問題となることである。「頭ではよくわかつて来ましたが、どうも信じられません」と言うのは、それは情意の問題とならぬということである。

頭でわかつたとは概念として知つたということである。概念を知つたことに力はない。

血と涙との洗礼を受けた時、いいかえれば現実の我が胸を通して問題が問題とされた時、それを行というのである。

頭で知るのは容易い。されど、それが我が生命となるには、そこに血みどろの精進が続けられねばならぬ。忠義をせよとの理屈は簡単である。けれどもそれを情意の問題として、大和魂の願力を我がものとすることは因難である。因難であつても、

情意の問題とならねば、それが生命となつたのではない。我が生命とするためには精進の一道を突進せねばならぬ。

向

人は社会的動物である。一人の問題は一切人の問題である。私どもが何かを得た時、自分一人のものとして封じておくことは出来ない。自らが信じた時にはそれを他に伝えようとする。

成道の積尊は、彼御一人のうちに一切衆生を発見したもうた。一切衆生はそのまま一衆生である。自己の道の明かになつた過去の聖者たちには、必ずそこに宣伝が伴つた。

自己一人を通して一切衆生を見、一切衆生によつて自己を見ることが出来るようになった時、一切衆生と我とを切り離して考えることは出来なくなる。そうした時、自己の情意は他人を愛憐の情をもつてながめ、それに働きかけようとする。そのはたらしきを「向」という。

自分は自分だけで聞いていさえすればいいのだ、その態度はいわゆる声聞の個人的利己的態度であつて、自利利他の菩薩の大道ではない。沈黙、独善、五十年ピラミッドの如く立てるものが偉大であるならば、人生にはついに何等の進展も興味もあり得ない。

さりながら、向から行は出て来ない。世には自己に何ら持たぬ者が、人に売ろうとする者がある。それは安価なる解決に腰をおろせるものか、世を名聞利養のために偽く者である。

解、行、向、それは三つのまが正しい信の内容である。

大理想

「恨めしい！」

それは幽霊の全体である。人は何が故に幽霊となるか。何が故に恨めしい心をかかえて風のまにまに動かねばならぬか。「恨めしい」とは希望を見失うた者の絶望の声である。前途に何等の光明をも見出すことが出来ないで、暗黒なる過去の囚となつた者の声である。

然り、幽霊には希望がない。理想がない。見よ、その心中に一縷の光が投げられ、その前途に希望の大光明が掲げられた時、人は絶望から蘇るのである。

幽霊も過去には希望もあり理想もあつたのだ。それが、希望はとり去られ、光明は消え、理想は打ち砕かれて、ついに「恨めしい」の一語だけ残された痛ましい幽霊となつたのである。

人間という幽霊の前に久遠の大理想が掲げられてある。はつきり言つておく。一切衆生悉く成仏することが出来る。

確信を与えるために、必ず如来たることが出来ると言つておく。まことに、「一切衆生悉く有仏性」の積尊の叫びこそ、一切衆生に対する大理想の揭示である。実に、この「一切衆生悉く有仏性あり。」と聞いた時、我等の心は躍りあがるのである。

三種の危険

雑誌「希望」の中にパスカルの言葉がひいてある。それを借りて来てペンを進める。

第一「人間にその偉大なることを示さずして、彼が如何に禽獸に近いかということあまり多く知らしめることは危険である。」

第二「又その卑陋なる点を示さずに、余りに多くその偉大さを知らしめることも危険である。」

第三「彼をして、この何れをも知らしめずに置くことは更に危険である。」

この三ヶ条をそのまま宗教壇上へ持ち来つて味わつて見る。これをいいかえると

第一「人間に、仏になれるのだという偉大さを示さずに、人間が如何に動物に近い盲目的本能的欲望によつて動いているあさましいものであるかを知らせすぎることには危険である。」

第二「しかしその卑陋、汚悪なる点をば示さずに、ただ、「仏になれるのだ、仏性があるぞ」とだけ知らせることは、危険なことである。」

第三「けれども仏となれることも、罪惡の凡夫であることも、知らしめないのは、一層危険なことである。」

こう味わつた上で、目を一転して社会の上を見渡して行こう。

最大なる危険

ここに牛馬に近い人間がいる。彼は自分のほんとうの相を見つめたことがない。又自分の全部を知らしてくる教養をも受けたことがない。それが最大なる危険である。牛馬に近い人ほどそれが甚しい。惡を惡と知る心がない。善を善として求める心がない。畜生と同じ暗い暗い本能を持つことを知らない。毎日毎日惡魔の軍勢にせきたてられて、貪欲瞋恚愚痴の三毒に毒せられていることを知らない。それと同時に、目が天上高く光の世界をにらむことを知らない。彼も亦一念發起して精進努力の一道をたどれば、彼の一生が至極の宝玉となることを知らない。彼が墮落の深淵に沈み果てるのは、彼の高き一面と彼の低き一面とを知らぬ故である。彼には修養も求道もない。宗教もない。道徳もない。

世間全体をこの目で見る。社会の大部分の人がこの眠れる姿で危険なる断崖にむかつて流れつつある。人のことだと言つてはいらぬ。彼らは、地獄を知らず、浄土を信ぜず、惡魔を見ず、仏を見ず、因果を信ぜず、真理に反逆して、ついに本能をそのままに肯定して、危険なる深淵に沈みつつある。

うぬぼれ

卑しい汚い点を知らしめずして、あまりに偉大なる方面を知らせることは次なる危険である。

人は誰一人として自分を低く見たいものはない。自分を善いと見、賢いと見たいのは根本的なる我執である。されば褒められて気持ちの悪い者は一人もなく、弱点欠点を直ちに諫められた時、誰も皆失望し、落胆し、時には腹さえ立てる。自分を高く売

りたい、自分を大きく評価したい、そうした久遠の執れを有するものに、重ねて彼が偉大であることをのみ知らせることは極めて危険である。

足が地についていることを忘れて、天上にのみ目をそそぐ者の足下は、千丈の奈落である。

夫婦喧嘩がたえず、父母に孝道はつくさず、村民からは毛虫のように嫌われ、酒癖は悪く、悪徒の親分になって、まだ天下一の賢者の如くうぬぼれた男。それが専門学校の卒業生である。

何等の修養もせず、世間並の生活を続けている者が、二三冊の仏書を読み、仏性の二文字に気づき、自分にも仏性があるのだと、悟ったように思っている者がある。識者の一笑にも値いしない。

世に世間からおだてられて天晴れ聖者を気取るお目出度い人がある。自分の赤裸々な姿にさめずして天使をもつて自ら任ずる。彼が偉大さを知れば知るだけ危険である。彼の裏から生きた力が動く時、偽善の二文字に気づく時、彼は人格の破産をせねばならぬ。

弊悪

人間にその偉大さを知らしめないで、動物に近いということのみ知らすことは危険である。

馬鹿だ、馬鹿だと、叱るばかりで大きくすれば、天性立派な子供でも馬鹿になる。年老いた田舎の同行が「私のようなつまらぬ者はとても信仰させて頂くことは出来ませぬ。」と自らを殺している者がある。立ちあがることの出来ぬ人間苦に度々打ちのめされた者が、ついに生きながら世を悲観すると幽霊となる。

動物と一緒に養えば人もまた動物になる。動物に近い人間と共に居れば、人もまた動物のような人間になる。動物的な汚さだけをひき出すことは、救うべからざる奈落に人をひき下す。花柳の巷に身を亡ぼす娼妓に貞操の觀念なく、虚偽欺偽を平気で行ふ賭博仲間には、真実の言葉は葉にしたくもない。娼妓に向かつて、人間の本能の丸出の話を持ち出し、貞操を守るもののない話を聞かせ、賭博の徒輩に人間に真実のない話を聞かせば、これにまさる危険はまたとあり得ない。

ほんとの道

「彼に前者と後者と共に示すことが正しい。」(パスカル)

神仏としての人間、動物としての人間、人間性にはこの二つが存在する。動物的な本能生活から逃れることも出来ないように、無限にこの汚さから脱しようとする願求がある。まことに神のあるところ、そこには悪魔が巢食うている。善には悪がからみ、光には暗がともなっているのが地上である。

地上に於てこの二つの対立について真に深刻に知りつくしたものは親鸞である。

古からの聖者は、人間の中に流るる動物的血とあまりにも戦った。そうしてそうした罪濁をきろうて光を憚れるの結果、ともすれば、暗い一面をあまりにも出さず、肉食せず、妻帯せず、静かに罪悪の巷を離れて、林間、堂廓に隠遁して、その清き一

面を後光の如く輝かして世を去った。偉大は偉大であるけれども、あまりにも人間性を知りつくした我等は無限の寂しさを味わざるを得ない。

まことに人は一度は必ず聖道の行者である。されど見よ。我が心中には無限の煩惱の賊がその猛威をふるうていではないか。追えども追えども群り集る悪魔の軍勢が一寸の隙もなく我が心中を荒らす。されど一面この悪魔煩惱の軍勢を我が心の主としておくことも出来ぬ心が動いている。煩惱を払いのけて進む願生の心と、それに敵対して行こうとする根強い宿業の力、この仏心と、この衆生心、善心と悪心とが共に結びつき、戦いあつて、離れてくれない所に我があるのであつた。衆生心は地獄よりはいい出た心であり、仏心は光の世界から来れる力である。我とはついに永遠の戦場であるのか。

もし悪魔の軍勢が勝つならば、我はついに永遠の地獄である。と言つて我が力で、この煩惱のすさまじい勢いをどうすることも出来ぬ。ここに人間としての行詰りがある。ここに仏にもなりきれず、悪魔にもなりきれぬ我が見出せる。

煩惱生活から目覚めないままに、極端に言えば、悪魔の心のみが心中に満ちて、それを問題にしない間こそ、平気でもあろう。人格の破産に気もつくまい。何の矛盾もあるまい。何の悶えもあるまい。悩みもあるまい。覚めゆく時でもない、悪魔が釈尊の成道をさまたげた風光は読めない。まことに、久遠の生命たる如来のみ心に覚める時、心霊の東天に光が輝きそめる時、必ず悪魔はその立場を失うまいと、彼の必死の大軍勢をくりだして、それをさまたげようとかかるのだ。

私どもは禽獸に近いということ知らされた。されどそれでよいのだとは知らざればなかつた。いえいえ心の奥底から朗々と叫ぶみ声は、動物に近くてもよいとは断じて言わなかつた。

菩提心と衆生心とが無限の争闘を続ける、そこに親鸞の見たはつきりとした世界がある。「定水をこらすと雖も識浪しきりに動き、心月を観ずと雖も妄雲なおおう。然るに一息つがざれば千載ながくゆく。」こうした心内の有様を我がほんとの事実として見たものは、決して善心や仏心が見えるものではない。ただ見る、心中隈なく占領しているものは煩惱、悪魔の軍勢のみである。善導の「罪悪生死の凡夫」たる痛ましい叫びが、自己を偽わらぬ者の心から叫ばれる。果しなき生死の苦海が行手に広がっている。

本願の宗教

我というものの正体はつきりと知られて来た。動物にもなれず、仏にもなれないところに我が存在したのである。ここに聖道門にとどまつて、此土入證ときとりすますことも出来ず、さりとてこの願心を棄てることも出来ぬ。本願の宗教はここから生れたのである。

断ちきることの出来ない業苦に縛られて、無明の広海に没在して行くその下には、それを限りなく救わんとする力が動いていた。その救わんとする力は一体何か。その力を我と見たが故に、ここに無限の争闘を見ねばならなかつたのだ。

実に、親鸞は、真実の救いのみ声を、このはてしなき戦いの中へ聞いたのであった。如来は沈める我を救わんとして、絶対に我をはからわせたもうてあったのだ。「罪はいかほど深くとも、我を一心にたのまん衆生をばかならず救う。」の勅命は、狂乱怒涛の心海に雄々しくも響いたのであった。「たのめ救う」「一念の信心」「信ぜよ、まかせよ、たのめよ。」言葉は変つても、彼の願力が衆生の魂のどん底に体験された時、それが即ち信心であった。信心こそ、それはそのまま如来にてましました。彼の絶対無条件の救済が体験された姿こそ信心であった。たのめも、まかせも、すがれも、願力に乗れも、それは決して救いの条件ではなかつた。そうして、念仏こそ如来の唯一の顕現であり、表象であつた。

罪悪生死の我が、そのまま、かの願力に乗せられてある世界には、争闘はなかつたのだ。ただ感謝と懺悔のみがあるのであつた。

厳肅なる事実として、悩める衆生の心に仏の大慈大悲が味われた時、死せる過古は蘇つて、彼の願力に活かされてあつたことがわかる。一切の善悪を貫いて、脈々として躍動する純一なる生命が、我の全部を活かしきつて進む。そこには、もはや幽霊は存在しないのである。

功利的信仰

「死んでおちて行かねばならぬ地獄がおそろしい。その地獄を逃れてお浄土へ参るのにはどうしたらいいか。自力では行けない。だからお他力で極楽へ参らせてもらえるか。」

大部分のお同行がここから出発する。出発はそれでいい。しかし何時までもそれにとどまつてはならぬ。もし、「どうしたら地獄をのがれてお浄土へ行かれるか」という心の前には、「信心さえ頂いたらよい」という答が与えられる。そうした場合の信心は、それは地獄から極楽への転換のために、信心は条件になつてしまう。信心が条件に見える間は、それは功利的に信仰が取り扱われているので、生命としての信仰ではない。生命としての信仰の前には、信心は条件ではなくて、信心それ自身が信仰であつて、信仰によつて何か外に「ものにしてしよう」という野望はない。ものにしてしようとする卑しいさもししい心のある間、それは断じて真の法悦や、大安心の境地があるものではない。功利的信仰であるならば、今日一日信仰がなくても生きて行けよう。されど、生命としての信仰はこれをなくした時は、我というものの存在さえ疑わねばならなくなる。

「どうしたら極楽へゆけるか。」そこから出発してもいい。しかし、単にそれに止まつている間は、まだ真の宗教圏内に入らないのである。生死を一呼吸の間に見つめ、今の罪悪の我を抱いて永遠の巖頭に立つ時、そこに真の信仰は生れて来るのである。

信心を極楽への切符と心得ている者の信心を定散自力の信心という。父母を父母と信じてたのみにする心、素純に孝道を守る子の信順の心は、決してそれが親子をつないで親子たらしめる条件でも切符でもない。親の慈愛こそ親子を親子たらしめた

唯一の力である。その慈愛を子心の上に体験された時、子の信の心は生れたのである。

如来が衆生の上に働きたもうて、その大慈悲心が衆生心を摂取した時、衆生にあつては信心といい、如来にあつては願力という。信心は衆生によつて味われたる仏心である。仏心と凡心との融合こそ信心である。こうした自力をはなれた信心には、「涅槃の真因は唯信心をもつてす。」という絶対の徳と力が備わっているのである。そうした信念こそは衆生の生命であつて、我よりこれを引き離すことを得ないのである。

何時までも、地獄と極楽と信心と、三つをならべてながめねばならぬ信仰者も亦、幽霊である。この幽霊信心のことを若存若亡という。もしは存するがごとく、もしは亡きが如し。幽霊の、風のまにまに、柳の木かげに、もしはあるがごとく、もしは亡きがごとく、もの哀れなるさまに似ている。生命としての信仰でなく、功利的信仰者に「それでは違ふ」と言えばヒョロつき、「それでいい」と聞けば、それをたのみ、終に他によつて動き、善悪によつて動揺し、教えから教えに迷い、言葉から言葉に飛び、終に幽霊でおわるのである。

人間の独立性と信仰

長い間絶対他力の信仰が人間の独立性を損うものと思われて来た。それは教義の罪でも親鸞の罪でもなくて、不徹底なる説教者と、功利的信仰者の罪であり、他力真宗を知らざる門外漢の無智の罪であつた。他力思想が人を横着にするとは、それはあやまれた批評である。

□他力とは恩の感得である。

恩は東洋思想の根源である。人にゆるされたる至高の情操であつて、人の真情の発露であり、生活の更正であり、感謝生活の根源であつて、人を横着者にする微塵の要素をふくまぬ。否、死せる人に真に生きる法悦の泉を与えて、活ける人格を生むのである。

□他力とは、迷の我が打ちくだかれて如来によつて立つことである。

如来は智慧と慈悲とである。如来によつて立つとは、智慧に動かされ慈悲に救われて、大安心のままに不退の精進に入ることである。如来の願力は自然である。自然は金剛である。必然である。この必然の力によつて立つのである。

□他力とは、お隣の金庫の金をあてにして、安価なる墮眠を貪ることではない。他力の一ばん大きなはきちがえはここにある。

乃木大将が赫々たる名をなして大和民族の神として祭られたということは、彼が真に明治大帝によつて生き、大和魂の願力？に乗托して生きたからである。彼は感恩の人である。真に他力によつて自ら生きた人である。明治大帝と大和魂とを、彼から取り去つた時、彼は一個の人形でしかないのだ。彼は且にも陛下を念い、夕にも国家を念い、一生を君国の間に捧げて、東奔西走、私有の乃木ではなくて、公有の乃木であつた。ここに真の他力がある。

且にも陛下を念い、夕にも国家を念う。且にも如来を念い、夕にも仏を念う。念仏こそ真の他力である。

□如来の願心が煩惱のただ中にひたひたと感じられて我等の信心となる。信心が外部に表現せられて称名念仏となる。念仏とは如来の上に我を見出し、念々に如来にはぐくまれて生きることである。それは断じて独立を奪われるのではなくて、永遠の独立こそ恵まれるのである。

□他力とは自力とならぶべきものではなくて、自力教の究極が他力教である。自力で覚りが開けたとか、我はこのまま如来であるとかいうことは、真に我の正体をつきとめず、いい加減なところで求道心がにぶつたのである。自力教でとどまるということは、厳粛なる人生の事実を忠実に見ざる不徹底なる求道者の一時的腰かけである。美しいと予想された我が打ち壊されることがあることを知らないのである。業力の根強さに目覚めた者は、そこに願力の不思議に救われて、全ての自力教が他力教に入るべき過程であつたことが知られて来る。

□他力だと言つても、寝ていることではなくて、この足が歩み、この耳が聞き、この目が見、この手が拝み、この口が称え、この心が思念し、この心が信じ、この心が感ずるのである。これこそ真の他力、絶対他力であつて、寝ている間に、石が棒でおされるようにして、浄土に行くのだと思う考えは、相対の他力であつて、平面的な浅薄な見方である。願力に乗ずるとか、如来に救われるとかいうことは、私の目も耳も口も足も、身口意の全てが如来に占領されて、仏心によつて動かされることである。

和讃に聖人は、

「阿弥陀如来の三業は 念仏行者の三業と

彼此金剛の心なれば 定聚のくらいにさだまりぬ。」

三業とは、身と口と意の三業のことである。凡夫の三業の上にたのむ形を表して、その上に如来の三業が表れて来るのではない。如来の三業が衆生の上に顕現れて、衆生の三業となるのである。如来心そのものが衆生の全てに表れて、衆生が如来を莊嚴してゆくのである。これが真の他力で、人間の独立性をそこなうものではないのである。

偉大なる未来

幽霊とは迷うている者である。死の国をさすらうものである。力のない者であり、光を持たぬものである。ただ彼は彼の恨めしき過去を有するのみで、偉大なる未来を持たぬ。暗き過去と灰色なる現実を有するのみで、光り輝く明日を持たぬ。

人間という多くの幽霊が、偉大なる未来を有せず、囚われの今日を、あくせくと蠢動して、彼の偉大なる半面と、悲しき卑しき半面とを知らずして暮す。彼らは幽霊なるが故に頭のみを有して足を持たぬ。頭の世界のみ働かして足を働かせぬ。如何にして働かずして多くの金銭を得ようか、名誉を得ようかと、文明人と称する幽霊が、頭のみ働かして、時勢の風のまにまに金を追うてさまよう。彼らはいかに偉大なる未来を有せぬが故に、尊重すべき今日をも持たぬ。

念仏行者は久遠の生命をふき込まれて、智目行足を授けられて、白道の上を光の彼方に歩む。彼の前には偉大なる未来があり、必定の菩薩という尊重すべき現実がある。

心霊の故郷

家のない子、親のない子。思っただけでも寂しくなる。帰りゆく家郷のない者ほど寂しい姿はない。

私は永劫流転の衆生たる我に目覚めて、その寂しさに戦慄した。されど衆生を生む者は如来であつた。

まことに現実我を救うものは彼の願力であつた。されど、白道の彼方に立ちて我をよびたもうのは、尽十方無碍光如来にいたしました。我々是我々の現実に執着するのあまり、彼の久遠の大理想たる如来を信ずることが出来なかつたのである。されど、彼岸の大理想こそ真に実在するものであり、現実の流動せる我は苦であり、無常であり、無我であり、空であつたのだ。真我にいたします、大我にいたします、常住にいたしますものこそ、彼岸の如来であつた。彼岸の光に照されてこそ、そこに衆生たる自覚は生れたのである。

かえりゆく久遠の親里こそ彼の世界であつた。しかも我は今、その帰りゆく道をこそ急いでいるのである。召されてかえる日を念う時、彼の生活は輝いている。誰か彼の本国慈母のもとに帰るを思うて奮いたたぬものがあるうか。

「久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里は棄て難く、未だ生れざる安養の浄土は恋しからず候ふこと、まことによくよく煩惱の興盛に候ふにこそ。名残り惜しく思えども娑婆の縁尽きて、力なくして終るときに彼の土へは参るべきなり。いそぎ参りたき心なき者を、ことに憫みたまうなり。」との聖人の悲歎は、永遠の故郷にかえりゆく者の、棄てがたき執着を悲みつつも、いよいよ大悲にむせぶ機の深信である。

我から彼方に呼びかけるのでなくて、如来こそ「汝よ」と呼びたもうのであつた。如来に「汝よ」と呼ばれたが故に、我は如来の一人子であつた。如来によつて「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護る」と呼ばれることに気づくとき、我は真に偉大なる公有の我として生き得るのである。

「信ずる者の幸福よ。信は至誠の心なり。」

静かにみ名をおもふ時。如来は我にありたもう。」

とは我が第七回歌「歡喜」の末節である。